

ころころ転がっている小石を見ていると心がホツとする。失いかけた感情と共に空を見上げる。

蒼く、透明。崇明であり、いつまでも続く言葉。

空は綺麗だと、誰かが言った言葉を覚えている。

少なくとも私の心に突き刺さったのは嘘ではない。ずっと傍にいてくれた猫と一緒に。

思い出の中にいろんなものを残している。そんな自分がいた。

からからと鳴る下駄が家屋にある。それをどこに仕舞ったのだろうか。

「ねえ、にゃんこちゃん。一緒に遊ぼう」

猫に思わず笑いかける。猫は鳴き声をあげて応えてくれる。そんな日常の一コマに幸せってあるのではないのか。

そんなことを考えていると、一緒に涙を流してくれた人のことを思い出す。

どうしてだろう、と考えている。

その人はどこにでもいるような人じゃない。普通に凄い人。それは単純に凄いという言葉で一括りできる大したことのない人。

それまで大切だった気持ちをどこに収めればいいのか。今の私にはわからない。でも、それが終わったのなら、これからも旅をしようと思う。

ここは寒い。ここは暖かい。

どこかに転がっている小石は寒気を求めている。それが本当だった。

小石を追いかける私は自分の夢を見つめていたのだろう。

その小石はもう、どこにでもある凄惨な人の子だった。

だから、空を見上げたのだ。

今でも見守ってくれていますか、と。